

第一期 第四十五回 (初版) (無料)

# 白井不思

本の「オトーネ

学びあう人々のため

2026.02.10 定有堂書店 発行

奈良 敏行  
(定有堂 主人)

## ルー・リードの太極拳

奈良 敏行

岩田 直樹

堀内 菜摘

萩原 俊郎

板野 巴香

おぎはしりやく

高木 善祥

村瀬 謙介

小原 修治

ムラカミヒロノ

齊藤 仁昭

三浦 永理

あきの素生

デラメリア

詩人の白井明大さんが、ヴェルヴュエット・アンダーグラウンドのリードボーカルのルー・リードが、太極拳の本を出したみたいだと教えてくれた。一〇一二五年十一月の中頃のことだった。白井さんは、音楽と武術の二つの異なる世界にまたがって生きる人の存在を、無視できないようだつた。

『俺の太極拳』国書刊行会の本のことだ。ルー・リードは一〇一三年に亡くなっているので友人たちが思い出を書き集めた本だ。みなアートに携わる人たちだが、ここにはただリードが異常に太極拳が好きだったという事のみが書かれている。リードは太極拳をするために薬物への依存も振り切っていた。不思議な人生のようにも思える。

友人のラモン・チョ・マツタ(ミコージシャン・造形作家)はラモン・リュイの「運命の輪」という言葉を援用している。

ルー・リードの太極拳  
「アシクイントヒコ」と「読む余  
風呂キヤンと帰省  
日々是雑言 (ぞうげん)  
普選録ノタルニア  
これまで本棚の魔境編  
Own Up Time  
本を作る側から (35)  
論語について (9)  
立春の朝  
内坪井町日記 (20)

迷った先のわたしの言葉  
としのはじめのめがねとして  
冬の「おとんグルメ」

編集後記…

『ある目標を持った場合、それがなんであれ、それを達成させるためには必ず、それ自体とは異なる別のふたつの事物と関わる必要があり、それをしないと絶対にうまくいかない』

恣意的な解釈のようにも思えるが、友人マツタは「ふたつの事物と関わる」生き方の驚きをルー・リードに発見したようだ。

他の友人は「太極拳は彼にとってライフスタイルだった」という。また別の友人は「太極拳や瞑想をするのも自分の中にいる悪魔を鎮めるためだ」といつている。

鎮めなければならないものが人にはあるのだろうか。リードの太極拳は型武術だ。一つの武術の型の中に狂気を閉じ込めていく。その狂気は拳の先から相手へとさし込まれることはない。太極拳には「昇降開合」という知見がある。狂気は天と地へ解き放たれるだけだ。破壊へは向かわない。呼吸を合わせて外部と一体化する方法だ。リードの音楽はどうだろう。太極拳と出合つてからは「ハドソン・リバー・ウインド・メディテーションズ」というシンセサイザーを用いた、「ブーン」という音がうねりつづけるドローン音（持続低音）の曲を作っているという。クリスタル・ボウルのような無限反響音だ。ダークサイドの音楽のようで、わたしは好きにはなれない。狂気（闇）を押さえつづける」と

を目的とした、いつまでも解放されるとのない曲は、ルー・リードには必要だったのだろう。

『太極拳の哲学は深いよ。そこには自己消滅の概念がある。太極拳をやっているときの自分は、もう自分ではない。つまりエゴを乗り越えていいる」ということ。そうやって徐々にエゴをなくしてゆく。太極拳をやってエゴをなくす。それが理想。』

ルー・リードの告白だ。「エゴを乗り越える」という課題を持つて生きる。どうやって乗り越える。そこに存在のもう一つのあり方が立ち現れる。存在の二つのあり方を自觉的に生きる。秩序により形成され安定した「自我（エゴ）」と裂け目に現れる「主体」、とそれを呼んでみる。

わたしは太極拳の志向性を「する」と「なる」というふうに考える。伝わりにくい言葉だが、もともと伝えようと思っていない。リードのドローン音の世界だ。わたしの狂気（闇）は「初発衝動」と「オブセッション」だ。この熱量をどのようにして型の中に押さえ込んでいくか、それが長年の課題だった。「する」は頭脳や知性の行為だ。一方「なる」は身体性の営みだ。

人生の速度をゆるめる。「する」と「なる」が等速度になるように時を止める。知識は時間と共に増えていく。増えすぎてやがて人を身動きのとれないものにしてしまう。

身体は手が算する。世が経じ世が経つほど、やがていじめが少  
なくなりていふ。

「自我（ヒトコ）」は闇におおわれる。反して「主体」の  
場からは外部が見える。必要なのは自我（ヒトコ）からの引  
き算だ。

二つの「いみ」にまだがって生きる。それは回転には出現し  
ない。壺に見えたり顔に見えたりする「ルンバの壺」だ。  
「ある」と「なる」。太極拳には「唐突にやつてくへの覚醒  
の瞬間」があるという。ほんの少し、闇の中に光が差す。  
闇を飼い慣らす方法は古人様だ。だからいの「覚醒」の  
光について語り合ひ、「とば」あだだにない。

2025.12.30

ルー・リード 『俺の太極拳』 国書刊行会 2025.12

奈良敏行+三砂慶明

『本屋のバハヤ』

作品社 2025



定有堂教室 「読む会」 （講師 沢田直樹氏）  
定有堂教室 「ドゥルーズを読む会」  
定有堂教室 「読書室ビオトープ」

それぞれ会場は とりぎん（県民）文化会館  
葉香太極拳クラブ

会場 麒麟スクエア（市役所）階 水曜夜・土曜日

・定有堂教室と太極拳の詳細は  
下記の QRコード参照  
(@エハメリニア)



『音信不通』紙版の置き場

・県立図書館2階ペントローナー

・Hスキース（倉吉）・森の生活者・那覇堂・

・SHEEPSHEEP BOOKS（定有堂ビル2階）

・定有堂ビル2階「音信不通」編集部



## 「終わる」と「続く」

—「ブックインどつとり」と「読む会」

岩田 直樹

(再解釈本舗・「読む会」講師)

一九八八年(私が就職した年)、「ブックインどつとり・地方出版文化賞」と「読む会」は始まった。「地方出版文化功劳賞」審査は一〇〇四年、「読む会」は一九九四年から関わっている。今年でそれぞれ二二年目、三二年目である。人生にとつて決して短い時間ではない。

『音信不通』二月号が定有堂ホームページに掲載されているときには、「ブックインどつとり」は三八年の歴史に幕を下ろしている。一月三一日(土)に地方出版文化功劳賞の表彰式・受賞記念講演が行われ、それをもつて多くの関係者のボランティア精神に支えられて地方出版文化を奨励・激励し続けてきた全国唯一の賞がなくなるのである。

「ブックインどつとり」とは何か。三〇周年のパンフレットにはこうある。「地方文化のバロメータのひとつとも言われる、地方での出版活動の重要性に目を向けたブックインどつとり実行委員会では、一九八七年鳥取県で開催されたブックインどつとり<sup>87</sup>「日本の出版文化展」いわゆる「本の国体」

を機に「ブックインどつとり・地方出版文化功劳賞」を制定した。以来三〇年に亘って、地方と地方そして人と文化の交流を積み重ねてきた。その結果今日では、地方出版への激励や奨励として貢献してきたことが全国から高く評価されている。(さらに詳しく知りたい方は二〇一七年一月の「今月読んだ本」第一八六回を参照していただきたい。)

毎年上半期、約一〇人の審査員が一〇冊前後の候補作を一ヶ月かけて読む。東京と鳥取県以外で出版された本が対象であり、昼間は仕事をしながら審査本を読み続けるのはひと苦勞だ。審査の原動力は、地方出版を顕彰して地域の文化を少しでも豊かにしたいという強い思いである。

過去の功劳賞では、アカデミー賞外国語映画賞(二〇〇九年)の映画「おくりびと」の原作である青木新門『納棺夫日記』(第七回、富山・桂書房、一九九三年)、平凡社ライブラリーのロングセラー渡辺京三『逝きし世の面影』(第一二回、福岡・葦書房、一九九八年)などが有名だ。私が審査員になつてからは、地を這うような緻密な取材で定評のある渡辺一史の『北の無人駅から』(第二二六回、北海道新聞社、二〇一一年)が最も印象に残っている。乗り鉄が書いた秘境駅の話だと思われそうだが、駅の背後にある人々の生活、歴史(開拓史)などを克明に描いた生活誌、民衆史の名著である。

私が審査するのは毎年一月か二月だった。どんな本に出会えるのか楽しみにしていたものだ。そのルーティーンがなくなるのはとても淋しい。現在、一人出版社や一人書店が増えているという。故長嶋茂雄氏の言葉を借りて「地方出版文化は永久に不滅です」と叫びたい気持ちである。

「終わる」ものがあれば「続く」ものもある。

三年前の四月、定有堂書店が閉店した。店舗は終わったが「読む会」は続いている。閉店の一ヶ月後、鳥取県立図書館で「定有堂[読む会]フォーラム」が開催された。タイトルは「定有堂書店[読む会]の展開—街の読書運動の可能性」。詳しくは、定有堂ホームページ掲載の奈良さんの講演「定有堂の生成変化」、私の「今月読んだ本」第二二九・二三〇回を、「覧いただきたい」。

「読む会」は鳥取西高校の名物教師(日本史)であった濱崎洋三先生(一九三六—一九九六)と奈良さんの出会いから始まった。

一年八組で行われた最後の授業「伝えたい」とは今でも鮮明に覚えている。約百人の教え子たちは教室に入りきらぎなく廊下にあふれていた。参加した誰もが先生の言葉を一言も聞き漏らさまいとしていた。七〇分の授業を終えた先生は「途中で痛みが消えてな、この調子なら冬季補習授業もやってみようか」とおっしゃっていた。一ヶ月後に他界されたとき、「あん

なにお元氣をうだつたのに」と言葉を失った記憶がある。

一九八八年当初は「岩波新書を読む会」だった。いつの頃から「読む会」となり、哲学・思想・歴史・社会などを扱った新書文庫を中心毎月読んでいる。開催は四五〇回を超えているはずだが、なぜか近年は第〇〇回「読む会」と言わなくなつた。「こんなに続いているんだ！」と開催回数にこだわつていた私も、いつからか数えることをしなくなつていて。

毎回一〇人前後の参加がある。メンバーは転勤、卒業で入れ替わることもある。「読む会は堅苦しい勉強会とはほど遠い。①参加は自由、②課題本を読んで、なくともいい、③他人の意見を否定しない、④課題本をリスクペクトする、⑤雑談やおしゃべりはOK、という「ゆるい会」である。」の「ゆるい」が「続く」要因の一つかもしれない。

一〇二六年は「戦後八〇年を超えて」「哲学・思想・歴史」「社会」の三つのテーマで、琉球処分、内務省、日本終戦史、世界哲学史、コミニンテルン、ユダヤ人の歴史、在野と独学の思想家・研究者、ケア、日本語、建築などの本を読む。興味のある本を扱うときだけでもよいので、気軽に参加していただきた(日時などはホームページ参照)。



## 風呂キャンと帰省

堀内 菜摘（仙台市在住）

年末、入浴をサボる「風呂キャンセル界隈」というものをしてしまった。12月27日から奈良の実家に帰省したのだけれど、何かがぶつんと切れたかのように急げ者になつた。

翌朝、父がいれたコーヒーの香ばしいにおいて目が覚め、母の「お風呂沸かしたよ～」の声につられて布団から出た。眠い目をこすりながら、いい香りの入浴剤が入った湯船に漬かる。そんな日が3日も続いた。

30日の夜、母に「明日は大みそがなんだから、お風呂に入りなさい」と言われ、子どものように「はい」と答えた。父が「きっと家ではちゃんとしてるんよ」と言い、母が「それは分かってる」と言う。2人が笑い合っているのを横目に、お風呂に向かつた。

私が一人で暮らす仙台の家では、「風呂キャン」なるものはない。家に来た友人から「これぞ丁寧な暮らし」と言われるよう、きれい好きな性格が前面に出た暮らし方をしている。そんな自分とかけ離れた「風呂キャン」を3日も続けてしまつたことに、情けなさや申し訳なさを覚え始め、30日以降はしっかり夜に入浴した。

これまで、帰省時にぐっすり眠ることはできるのは、自分の家にある安物のベッドよりも、畳の上に敷いた布団の方が心地よいからだと思っていた。社会人4年目になって思うのは、「大丈夫、ここは安全地帯だ」という感覚。

私が生まれてから26年。長い年月をかけて両親が築き上げてくれた、実家でしか味わえない安心感に身をゆだねる。その中の、最大の甘えが「風呂キャン」だったんだろう。私、甘えてまーす！ という表明のような行為だった。

年が明けた2日は、母と初売りを楽しんで、仙台に戻る。どの店で買い物をしようか、何を食べようか、と父がいれたコーヒーを飲みながら、母とぎやかに話していた。

母がふと席を立つと、父がちゅうぶりさみしそうな顔で

「次はいつ帰つてくるんや」と言つた。

「夏(ひ)るかな」

「そうか、楽しみに待つてゐるわ」と父は控えめに笑つた。その表情が心に残つた。

2日の23時(二十三時)、仙台の家に戻つた。

関西との寒暖差に驚きながら、寝室の暖房をつけ、その足でお風呂を沸かした。「風呂キヤン」をし続けた怠け者の自分と、「きっと家ではちゃんとしてるんよ」と笑う両親を思い返して、思わず笑つた。

ああ、いい帰省だつたな。

セイコー時間白書2019によると、20代後半の自分が、母親と会つて話せる「生涯残り時間」は、別居の場合、42・3日。父親とは19・6日だそう。

2025年を振り返ると、実家に帰つたのは、年始の数日間と、大阪出張時に立ち寄つた数時間だけだつた。

そういうえば昨年の夏、両親が仙台まで来てくれたことが

あつた。行きつけの店に一緒に行った時、普段よりも多くのお酒を飲んだ父。「東北のおいしいご飯を食べて、仕事、頑張つてゐるんやな」。父は、私の日常を想像するかのように、そう言つた。

母とはよく長電話をして、仕事やプライベートの話をすらが、父と長時間話したのは久しぶりだつた。今になつて、離れて暮らす娘を心配して会いに来ててくれたこと、頑張つているのを知つてほつとした言葉だつたことが分かつた。

控えめに笑う父を思い出す。

夏とは言わず、春に帰省しよう。休める環境をつくるために、しっかり働かなきやだな。

「年3回以上の帰省」が今年の目標になつた。

## 日々是雑言（だいじやん） 13

萩原 俊郎

(倉吉市在住者)

口うる気になることを、つれづれなるままで。

「本当の老後」がやつて來た

してから、皮肉な」と、「とりあえずメシを食わなければ」と、あたふた働いて過ぎしてきただ。六十代は、かくもあつけなく過ぎ去るものか。なんだか急に「本当の老後」がやつて來た感じだ。

「何をしてもいいし、何もしなくていい」老後の生活は、なかなか取り扱いに苦労する。しかも、人生で一度きりの体験、いつまで続くか分からぬ旅である。さて、「悔いなき人生」とやらを送るには、どうしたらいいのか。

それにして周囲をながめれば、国内も外も、もうグチャグチャである。「自分を總理と認めてもらいたための解散」だつて？ 呆れてものも言えない。テレビをつけると、あのふんぞり返つた大統領の顔が毎日映る。「この齢になつて、まさか、こんなひどい世界になるとは」。同級生同士で再婚した今のカミさんと、深いため息をつく。

遠のく「米百俵」

また退職後、乏しい年金生活を支えてくれた大山のゲストハウスも、「お父さん、亡くなる前にちゃんと始末としてよ」という娘たちの声を受け、年明けから事業承継の手続きを進めている。引き受け手が見つかってよかつた。元いた新聞社の三年がかりの社史の執筆・編集も、今年五月、ようやく終わる。

ふと、七十代突入まで二年を切つたことに気づいた。退職

日本人は、もう少し頭がよいと思つていた。  
はつきり言つて、この総選挙、どちらが勝とうがお先は真つ暗である。悲しいことに、与野党そろつて「減税ボピュリズム」を競つてゐるからだ。

消費税廃止や「年収の壁」引き上げは、物価高に苦しむ国

民から歓迎されるだろう。でも、それは一時の対症療法に過ぎず、野放図な国債発行と財政の硬直化はさらなる田安を招き、物価高はますます深刻化する。

前にも書いたが、幕末から明治の長岡藩が財政の窮屈を克服した「米百俵」の言葉が、かつて年末の流行語大賞に選ばれるほど、日本人に人気だったことがある。

米をよこせと押しかけた藩士らに「百俵の米も食えばたちまちなくなる。教育にあれば明日の一万、百万俵となる」今はがまんしても、未来の自分、そして子や孫のために使おう。そういう説いた藩の指導者がいた。米を売った金で学校を建て、同藩は優秀な人材を輩出した。

今、有権者に「これをやるなら、これはやめよう」と呼びかける政治家はいないものか。「ポリシーある政治家とは、本来そういう人間を指す」と友人の政治学者、山口一郎。「米百俵」は日本人からますます遠のいていく。

### 「英國病」に学ぶ

さて、この傾きつつある国で、どう老後を暮らすか。

昔、鳥の劇場の中島諒人さんを取材した際、「一九五〇年代、「英國病」と呼ばれるほど国力が衰退した英國はアート・スクールをつくり、芸術文化を振興した「そこからビー

トルズやストーンズが生まれ、たっぷり外貨を稼いだわけですね」と話が盛り上がったことがある。

「親世代より子どもの方が貧しい」という悲哀を、英国民は日本より半世紀以上も前に体験している。でも、彼らはなんだか明るく幸せそ�である。

自宅のガレージで、成人を迎える娘のためローバー・ミニをひとつDIYで組み立てている英国のお父さんがテレビで紹介されていた。「金はないけど、楽しいからね」と彼は言う。「近所では別に珍しくないよ」。

財布と相談しながら、自分なりの喜びや楽しみを見つける力。ここはひとつ、「英國病」に学ぼうではないか、というわけで、年明けに中高年バンドを結成した。その名も「シルバー・ビートルズ」(笑)。この齢でハラハラドキドキ、大いに恥をかくのも悪くない。おとどし手に入れたカブで、まだ見ぬ日本の山野を旅して回るものい。

いつまで健康寿命が保てるか分からぬが、目の前に広がるのは、山あり谷ありのロング・アンド・ワインディング・ロード(老後)である…おあとがよろしいようで。

## 普遍的ノスタルジア

板野 田香

(薬剤師・岡山県在住)

前回、私は文学や芸術作品において「幽靈が消えない理由」について書いた。それは、過去の出来事や失われた記憶が想起されるという話ではなく、「不在そのものが感覚的構造として立ち上がる」というものであった。タルコフスキイの映画『ノスタルジア』や Tempalay の楽曲『Ghost world』も、意図的にそうした性質(ある意味、異質なもの)を内包した作品であり、観る者に對し強い郷愁を呼び起す。だが、おかしなことに、この「郷愁」というものを、別の形でも経験している。しかも、作品を通じてではなく、現実世界において”である。生きる世界で現れる、理由の分からない”ノスタルジア。今回はそのことについて書いてみようと思つ。

もう十年以上前の話にはなるが、その日、私はスロバキアの片田舎を訪れていた。目的はスピシュ城(廢墟)という『天空の城ラピュタ』のモデルにもなった城を見るためである。駅からバスに揺られる、と数時間、ついに田舎地であるプレ

ショフの町に降り立つた。町には赤橙色の屋根をした小ぢんまりとした家々が並び(風化している建物も多かつた)、古都という言葉がよく似合う街並みであった。しかし、その日は霧が強く出ており、古城へ上る道がなかなか見当たらぬ。プラプラと歩き回つていると、白緑の霧がかかる緩やかな勾配のある平原が視界に入り、その風景に泣きたくなるような寂しさ、安堵感を覚えたのである。それは不思議な感覚だった。私の「記憶に似ても似つかない」の風景が、なぜこんなにも懐かしいのだろう——そんな違和感が残つた。

この違和感に対し、心理学や神経科学はどこまで答えを用意しているのだろうか。近年、ノスタルジアの神経基盤については、脳画像研究によつて徐々に明らかにされつつある。

オオバらは、fMRIを用いた研究において、海馬と報酬系が活動する」と、ノスタルジア体験が生じることを報告した(Oba K, 2015)。この研究では参加者に對し、幼少期と結びつきやすいが、それ自体は特別な感情を伴わない写真を見せ、その後の情動反応を検証した。その際、「懐かしさを感じるよう」と誘導するようなどはしなかつた。にも関わらず、参加者は強いノスタルジアを報告し、その最中、海馬と報酬系の回路が同時に活動していたのである。やがて興味深いのは、この研究において、ノスタルジアの

強調が「どれほど鮮明に思ふ出せるか」では説明されなかつた点である。むしろ、ほんやうとした *gist* のような過去の再活性が重要であったと報告されている。これは、ノスタルジアが詳細な出来事の想起ではなく、過去の全体像や雰囲気が、価値づけを伴つて知覚される現象であることを示している。

つまり、ノスタルジアは鮮明な記憶を必要とせず、刺激に触れた瞬間に、自動的に立ち上がりうる体験だといつゝのだ。しかし、それでもなお、ノスタルジアには「自身の経験」へのリンクが前提とされてくる。

では、心理学面ではどう解釈されるのだね。自分が生きた、とのない時代や場所に対しても、覚える懐かしさについては、アネモイア(*Anemoia*)という言葉がある。直接には経験していない物事や郷愁——。しかし、このアネモイアという言葉も「The Dictionary of Obscure Sorrows」(存在しない感情を定義する辞書)が生み出した造語であり、学術的な資料は存在しない。心理学の分野では、のようないい感覚は「歴史的ノスタルジア」や「代理的ノスタルジア」として定義されているが、その多くはメティアや物語であることは商品やブランドが喚起する魅力として論じられており、実際にその場に立つたときの体験を、十分に言い表していくとは言い難い。そこではノスタルジアは、価値として説

明されていても、個人における知覚としては捉えきれないのだ。

今回、「経験してない景色への郷愁」を解明しようと意気込んだが、どうやら、が行き止まりのようだ。うーん、なんか消化不良。しかし、個人的な記憶に結びつかないが、自己がその場と連結されるような感覚——いわば「普遍的ノスタルジア」と呼べる何かがあるような気がするのだ。事実、「The Dictionary of Obscure Sorrows」にむのの感情が収録されているのだから、多數と言わば、おども一定数の人間がこの感情を持ちつつも、既存の用語で定義づけられなくなるのであるのだね。

科学的に証明不可——であるとするだけば、あのとき霧のかかった平原に抱いた感情は、きっと幽霊が私の知覚を借りてみた景色だったのだ。今は、ふくふくソリソリね。

# ときめく本棚の魔境編

読んでない読書（3）

おぎはら きえ  
（蔭山）

年明けから心躍ることがあった。

ある程度の蔵書をお持ちの方ならもはや当然のことかと思うが、私の本棚は一段の棚に手前と奥と二重にして本が収められている。大まかなジャンルと判型、作者でまとめて並べており、既読本と未読本は混在している。今年は未読本を減らすぞと、棚をチェックしていると奥の方に山崎豊子著『白い巨塔』（新潮文庫）を発見した。全五巻、ちゃんと揃っている。すごい！これ読みたかったんだよねー、と自分の本棚なのにふらりと入った古本屋の棚で見つけたようなときめきを感じた。『白い巨塔』長いから、図書館で借りるより買ってしまった方が落ち着いて読めるだろうと買っておいてくれたんだ、私が。

自分で買って自分で棚に収めておきながらすっかり忘れていたというだけのことなのだが、すっかり忘れすぎて、新鮮に喜んでしまったことに我ながら驚いた。

前号でも触れたが、定有堂教室「ドウルーズを読む会」で読んだ松本卓也著『斜め論』（筑摩書房）をきっかけにハイデガーをもうちょっと勉強してみようと思った。『存在と時間』をいきなり読んでも挫折するのは目に見えているので、解説本から入ろうと「ハイデガー」をキーワードに書籍の検索をしてみた。その中に木田元著『ハイデガーラーズを読む会』で『反哲学史』（講談社学術文庫）と『現象学』（岩波新書）を読んだことがあるし、文体 자체は読みやすかつたからいいかもと思いながら、以前読んだことをなつかしんで本棚を探してみたら『現象学』の隣に『ハイデガーラーズを読む会』が並んでいた。唖然とした。いつからそこにいたんだ。

これも以前本誌で触れたことがあるが、私は「図書館日和」という蔵書検索アプリを利用しておらず、そのアプリ内の読みたい本リスト（仮想積ん読と呼んでいる）に千冊以上の本を登録しているのであるが、それを眺つてみると二〇一二年の十二月に「（本誌発行人の）奈良さんオススメ」というメモとともにこの『ハイデガーラーズを読む会』が登録されていた。図書館で借りる前に古本屋で見かけて買ってしまったのだと思う。

読みたい、借りて（買って）、かなきやと思つた本がノー

タイムで読みはじめた」とに感動した。勧めてくれてありがとう、奈良さん。買っておいてくれてありがとう、過去の私。木田元さんはハイデガーの『存在と時間』執筆以前の経験から丁寧に解説してくださいたつていて興味深く読んでいいよ。

読むペース度外視で本を買ってしまった原因の一つに「もう古本でしか手に入らない作家（作品）を好きになってしまった」というものもある。私にとって吉田知子の著作がそれで、最初は図書館から借りて読んでいたが「（貸出期間の一週間だけなんて耐えられない！ずっとそばにいて！」と古本のネットショッピングを検索し、あればすかさず買って集めている。

ここで一つの結論に至った。五冊十冊程度の積ん読であれば「今後のお楽しみ」と言えるだろう。これが二十冊三十冊と溜まつてくると自分の読書ペースが追いついていない不甲斐なさと「お金の無駄遣いでは？」という不安で本棚を見ると心が痛んだ。しかし未読本が一体何冊あるのかわからなくなると、自分の家の本棚がもはや本屋の棚のように見えてきて楽しくなる。

以前ミニマリストに憧れて、「至高」「また読みたい」という本だけ残し、そこまで思い入れがない本、何年も未読のままの本は処分したことがある。今思えばそういう本

でも私の志向、興味関心の遍歴だった。どうの昔に処分してしまった、小学生の頃に読んでいた何百冊もの漫画本も含めて、後悔とまでは言わないけれど、アルバムを見るようにならが収まつた本棚眺めてみたかったなあ、などと思つ。

先日、Xで夏葉社の島田潤一郎さんの投稿を読んだ。

『昨年は話題の本は読まず、ひたすら積ん読解消に力を注ぎました。結果、学生の頃に買った本をはじめ百冊以上の積み本を読むことができました。買った本は読まないと気がすまないと、うぼくにとって一番攻略が難しかった本は「百円だから買った本」です。そんな動機は本を読むとの助けにはなりません。』

『「百円だから買った本」との格闘はきっと死ぬまで続きます。どうせまたヒヨイヒヨイ買うはずなので。』（二〇一六年一月七日の投稿より）

私も島田さん見習つて今年は積ん読の山を崩すことにな力しつつ、堂々と補充もして、うぼくのだつた。

# Own Up Time

高木 善祥  
(SHEEPSHEEP BOOKS)

たことから、発祥の地であるイギリスとジャマイカとの関係を踏まえて分厚い社会学／思想書を。後者は「成り上がるためにはプロスポート選手になるかロックスターになるか」の一択だった時代の話のネタとして。(ちなみに矢沢永吉のことは生徒さん全員知らなかつた)

先日、鳥取市内の高校にお邪魔してきた。授業でブックカードを「デザインする」と企画し、その前段として「本屋さんに話を聞く」となった。そこで、美術を選択している八人の生徒さんの前でお話する機会をいただいた。

何を、誰に伝えたいのか、目立たせたいのは著者・タイトル・装丁のどれか、書店の店頭に並んでいる状態をイメージするなど、売る立場から本のデザインをお話した。

一般的な話をするだけだと面白くないかなと思い、生徒さんが選んだ本を事前に教えてもらつていたので、「次に読んだら面白いかもしけない」一冊をそれぞれ紹介した。

せつかくなので一例を挙げておく。『ウサイン・ボルト自伝』(集英社インターナショナル)を選んだ生徒さんには、ポール・ギルロイ『ブラック・アトランティック』(月曜社)と矢沢永吉『成り上がり』(角川文庫)を紹介。

前者は、もともとボルトはクリケット選手を目指してい

あるクリニックから依頼をいただき、七十点ほど選書した。店の宣伝も兼ねているので、

- ①走番として店でコンスタントに売れているもの
- ②来院される方が気軽に手に取れそうなもの
- ③その地域に関するもの
- ④院長やスタッフの皆さんのおススメ

を元に考え、選書リストを何度もやり取りして、NG事項を共有していく。

- ・前向きな内容であつても「死」やそれに近い言葉が書名にあるのは外す
- ・社会問題に関するものも、個人にとっては「アリケートな事柄なので外す

・理系の読み物は、自分(=クリニックの院長)が未読だとエビデンスが保証できないので外す

など。手に取るのは体調を崩してクリニックに来られる方たちなので、言われてみれば「当然の指摘だった。そ

」に気づけなかつたことを反省し、次に活かそうと思う。

ちょっと話はそれるが、先方とリストを共有するために、ISBNを入力すると書影と書誌情報が表示されるグーグルスプレッドシートを作成した。こういう仕組みづくりが、地味に楽しく相変わらず得意である。

\*

二月発売予定のある本を仕入れるかどうかで悩んでいる。複数の書店員が自身の仕事について書いたエッセイ集といった体で、SNSでは少し話題になっている。

しかし発行元のプロモーションは、業界や出版社への不満や愚痴が前面に押し出されていて、どうにも食指が動かない。書き手は名の知れた書店員ばかりなので、それだけではないだろうが、「今更そんな話題にフォーカスされてもなあ……」と思つてしまつ。

個人的にはそう思う一方で、読みたいお客さんがいる可能性はある。商売である以上、顧客の求めるものは(公序良俗に反するものでなければ)仕入れて店頭に並べるのは本屋として当然のこと。

たつた一冊であつても、本を選んで仕入れることの悩みは尽きない。(でも楽しい)

#### 【参考文献】

『読んでいない本について堂々と語る方法』ピエール・バイヤール　ちくま学芸文庫  
まだ発売されていない未読の本を批判的に取り上げる」との罪深さ。ちなみにこの本も読んできません。

#### 『柳田国男入門』鶴見太郎 角川選書

今年は民俗学を学ぼうと思っている。版元品切れなので、角川ソフィア文庫あたりに入つてくれないかな。

『人といふことの、すゝまじかとすればしゃ』『やへくちゆみ』トワイライト  
良いタイトル。

# 本を作る側から (35)

村瀬 謙介

(小取舍)

二〇一五年を一字で表すと「駆」だった気がする。割と村瀬謙介というキャラクターのせいかな悩みなどないような印象を持たれことが多いようで、そんな中話を聞いてくれた友人がいていつもの気分を取り戻すことができた。

素晴らしいタイミングで心が荒むようなちょっととした出来事が複数重なり、年末から年始にかけて病んでいた。とはいってもその期間に会っていた方にはそんなそぶりを見せるわけではなく、表面的には普通に過ごしていた。病院に行くようなほどではないと思い自分でパソコンで色々調べたりするとあるサイトの「はい」「いいえ」で答える簡単な診断をすると中程度のうつ状態だと診断された。最もクリニックのサイトなのでそれで診療させようつて手だとバレバレなのでそつと閉じた。そんなわけはない。気分転換をしようと思うがこのところ天候が悪いのでバイクにも乗れない。体感温度が外気温マイナス五度くらいになるのもきつい。温泉にいっても何かさっぱりしない。ちょっととしたことでイライラするし悲観的になる。いや、本当にまだまり人と会わない年末年始でよかつた。こんな感じになるのは初めてに近い。少々息抜きが足りなかつたか。思えば

というわけで(?)前回の音信不通の締切を終わつたりからジャーナルをつけている。ダヴィンチやゴッホなどの偉人をはじめ、チャットGPTを作るオープンAIのサム・アルトマンも活用しているそうだし、心への効果もあるらしい。何があつたかだけでなくその時の感情も記録するのがジャーナルのミソらしい。媒体は何がいいかなと考えて、ジャーナル用のアプリで日々の記録をひと月つけていたが気づいたが、やはり手で書く方が良さそうだ。アブリだとかさばらないし、いつでも携帯しているのでそこは便利だが、見返すにはノートの方が良い気がする。

スケジュール帳はもう何年も無印良品のスケジュール帳を使っている。手帳の前半は見開きに月のカレンダーの枠があつて、手帳後半は左頁が週の枠、右頁が方眼がついた自由帳。長年それを使つていたが新作がリリースされたので二〇一六年用にはそれを買った。前半は一緒に月のカレンダーだが、後半は一日ごとに四日分が見開きに。日付

部分を書く所が空いでいるので詰めてかけるから良い。」のスケジュール帳、日付が全く書いていないので自分でカレンダー部分に日付も書き込まないといけない。日記はスケジュール帳には書かないので打ち合わせ内容を後半ページに使う。たまに手帳を持ち歩いていない時に予定が入る、もあるので。グーグルカレンダーにも手帳に書き込んだ予定と同じものを打ち込む。スケジュールは他人との打ち合わせや支払いやイベントなどの予定しか書かない。その日のタスクは手帳でもアプリでもなくA4用紙の裏紙などを使って日々のリストを書く。

ペンは三色のフリクション一本と普通の黒ボールペン、ちょっととしたお絵描きメモ(和語化するより絵で残す方がいい)アイデアもある)用のタッチペンの三本を持ち歩いている。

ノートの書き方を紹介した書籍や動画を色々見たが、自分に合うかどうかは試してみないとわからない。自分には合わないと思ったものがほとんどであったが、それでも諦めず試してみて、これはいいなという部分だけを抽出して最適解を詰め込んだオリジナルのノートができれば良いと思っている。が、結構飽き性なのでフォーマットを作ると変え

たくなるのだった。やはり自由帳が自分には合っていないのだろうか。

そんな感じなので打ち合わせをする際、他人の手帳やノートの使い方が気にならぬ。相手の手帳に付箋がたくさん付いていたり、色々なもの挟んでベルトで留めている手帳を見ると打ち合わせ内容よりもそちらに何があるのか気になってしまふ。鳥取の文化人の皆さんのが思方法が気になる。一体何がどう記録しているのが。

『人間疎外の時代』  
高取正人著  
本体1000円  
発行 2025.11  
小取舎の最新刊



# 論語について（9）

小原 修治

（県立高校教諭

湯梨浜町松崎在住）

子曰、君子周而不比、小人比而不周。

（為政篇第二・第十四章）

子[し]曰[い]はく、君子は周して比せず、小人は比して周せず。

『論語』には全く同じ句が別の篇に収録されている」とがある。例えば、「巧言令色、鮮[すくな]きがな仁」は、学而篇と陽貨篇とに見える。本章の場合は、全く同じではないが、子路篇に「子曰、君子和而不同、小人同而不和（子[し]曰[い]はく、君子は和して同ぜず、小人は同じて和せず）」という章があり、本章とこの章とは同一内容の異文だとする説がある。乾一夫の論文「君子への基礎資格—孔子における君子觀の基底」で説かれている説である。

それによれば、本章の「周」の字は「調」の字の省体の仮借用法と見られる。事実、『広雅』には「周は調なり」の説解があり、更に『説文解字』に「調は和なり」とあるから、本章の「周」の語を子路篇の「和」の語と同概念と見ることが出来る。また、本章の「比」の語についても、『礼記』樂記篇の鄭注に「比は猶[な]ほ同の「ときなり」とあるのみならず、『広雅』には「比は輩なり」とあり、『廣韻』には「同は輩なり」とあるから、これを子路篇の「同」の語と同概念と見る」とが出来るというのである。

右の論文では、両章について「その意は、「君子は意見は和合するが、ぐるにはならぬ。（それに対して）小人はぐるではあるが、意見は和合しない」という」とである」と述べ、「小人の言は自己の利にはしり、各自てんでんばらばらの」とを言つて、言い争うとの意を含めたものであるに相違ない。それに対して、君子は道義をわきまえているから、他人との調和を保ちながらも、存在としては民衆と一線を劃している」とを言うのである」と説いている。また、『韓詩外伝』卷二に見える「君子は和し易くして狎れ難きなり」の句を挙げ、これを「君子は周して比せず」「君子は和して同ぜず」とほぼ同じ意味の句だとも説くが、その通りだろう。私見では、衛靈公篇の「君子は矜にして争はず、群して党せず」も、ほぼ同じ意味の句である。

一体、『論語』には「君子」と「小人」とを対比する章が十八もある。古来「君子」と「小人」との違いに定説は無いが、前に紹介した安田登の説では、「君子」とは心を使わうと決めた人のことであり、逆に「小人」は心を使わず無意識の反応をそのまましてしまう「ふつうの人」のことだとしている。この点、先述の乾論文でも、述而篇二十五章の「子曰、聖人吾不得而見之矣、得見君子者、斯可矣。子曰、善人吾不得而見之矣、得見有恒者、斯可矣。亡而為有、虛而為盈、約而為泰、難乎有恒矣。(子[し]曰[い]はく、聖人は吾れ得て之[こ]れを見ず、君子者を見るを得[う]るは、斯[こ]れ可なり。子[し]曰[い]はく、善人は吾れ得て之[こ]れを見ず、恒有る者を見るを得[う]るは、斯[こ]れ可なり。亡[な]きを有りと為[な]し、虛[むな]しきを盈[み]てりと為[な]し、約にして泰[ゆた]かなりと為[な]せば、難[かた]きかな恒有ること)」を引き、「君子」について似た説明をしている。

それによれば、右の述而篇第二十五章に見える「子曰、聖人吾不得而見之矣、得見君子者、斯可矣。(子[し]曰[い]はく、聖人は吾れ得て之[こ]れを見ず、君子者を見るを得[う]るは、斯[こ]れ可なり)」の句と、「子曰、善人吾不得而見之矣、得見有恒者、斯可矣。(子[し]曰[い]はく、善人は吾れ得て之[こ]れを見ず、恒有る者を見るを得[う]るは、斯[こ]れ可なり)」の句とは、前者の句に見える「聖人」と後

者の句に見える「善人」とが同概念を表すと考えられるため、両者を同一内容の異文と見ることが出来る。すると、前者の句に見える「君子者」と後者の句に見える「有恒者」とがまた同概念を表すことになり、「君子」とは「恒有る者」だということになる。

では、「恒有る者」とはどういう人か。乾一夫によれば、それは『孟子』梁惠王上篇に言う「恒心有る者」のことである。そして、「恒」や「恒心」の語こそ「君子」の概念を解明するキーワードとして、次のように説いている。「恒」が「心」に従う字で、固定して動搖しない心の意であり、後の「恒心」と同じである以上、先の聖人・君子觀には、精神的側面により多くの比重がかけられているであろう」とが思われる。従つて、君子概念の精神的基礎は、この「恒」すなわち「恒心」に立脚していると考えられる。

右の乾説は、先に挙げた安田説とほぼ一致する。思うに「君子」とは、確固たる覚悟で揺れ動かない心を持とうと決めた人のことである。だからこそ、本章に言うように、人と調和しながらも追従し結託する」ことがないのである。

# 立春の卵

ムラカミヒロノ  
(フライングブックマン)

「太陽の視黄経が三百十五度になつた時が、立春であつて、年によつて少しずつ異なるが、だいたい一月四日頃に当たる。地球が軌道上の或る一点に来た時に卵が立つのだから、卵が三百十五度という数値を知つている」とになる。」

立春が近くなると(今年は二月四日)、誰言うとなく話題に上るのが「立春の卵」である。普段は立たない生卵が、立春の日に限つて立つ、といふやうか都市伝説めいた話である。

我が国では、昭和二十一年から広まり始めたらしいが、新聞に載つた、元々は中国の古書に由来する云々、の出自こそいかにも都市伝説のセオリードおりで胡散臭いが、その後、気象台や新聞社が実際に実験をして立つことを証明して見せた所に偽りはない。

そんな馬鹿な話はない、という訳で、先生、弟子に卵の表面を顕微鏡で調べさせ(前後の細かな説明は長くなるので省略するが)、要するに、卵の殻は凸凹だらけで、そこかしこに微小な突起がある。その突起の三點乃至四点の間に重心を持つべくようすれば「立つ」ということを証明した。「これで卵の立つ力学はおしまいである。」

卵は橢円形をしているから、転がつてしまふのであって、四角だつたら、何の苦労もない。

そんな発想で書かれた小説がある。

サキの短編(というより、ショートショートと呼ぶべきか)で、そのものズバリ「四角い卵」である。

さもありあらずこそ、物理学者である中谷宇吉郎先生、俄然張り切つて、この謎を解き、実証せんとなされた訳だ。その顛末を書いたのが、「立春の卵」(世界二十一年四月)。氏は、「雪は天から送られた手紙である」の言葉で知られた「雪博士」である。

卵は、転げて割れて無駄になつてしまつゝことが多く、主婦たちを悩ませている。これを解消するにはどうしたらよいのか。卵を四角にすればよい。多くの鶏を飼い、少しでも四角

に近い卵を産む鶏を選び分け、同じ傾向を持つもの同士を掛け合わせ、何代も重ねて、遂に四角い卵を産ませることに成功した、と自称する男に投資を持ちかけられる話である。

サキという作家は、シニシズムが服を着て歩いているような人であった。ブラック・ユーモアも「」に極まり、というくらいに黒い作風で知られているが、この短編は彼にしては、ずいぶんと大人しいオチになつていて拍子抜けする。

「卵の四角と女郎の誠、あれば晦日に月が出る」という言葉が、あり得ないものの警えとして、江戸時代にはよく使われた。

しかし、今や、四角いメロンやスイカがある御時世であり、四角い卵も、調理レベルなら珍しくない。卵焼きは四角いフライパンで焼くのではないか。  
まあ、四角い卵を産ませるのは、不可能だろうし、そのような試み自体、動物の生理に反しているから批判も出るだろう。

一方、同じ作者の「イースターエッグ」は、かなりどす黒い。ストーリーの紹介そのものが、ネタバレになつてしまふの

で、興味のある方は是非原典に当たつていただきたい（『クローヴィス物語』所収）。

総じて、ミステリやホラー小説に出てくる卵は、何が生まれてくるか分からぬ、という所に恐怖がある。「イースターエッグ」もそこがミソだが、他にも夢野久作の「卵」や、高橋克彦の「不思議な卵」があり、漫画では夢野一子に「虹色の卵たち」という秀逸な特撮バロディーがある。

そんな特撮ドラマの雄「ウルトラQ」には、不思議に卵ネタが多い。「ゴメスを倒せ!」「宇宙からの贈りもの」「虹の卵」「海底原人ラゴン」「宇宙指令M774」、いずれも卵が重要なモチーフだ。

映画だと、「モスラ対ゴジラ」。ザ・ピーナッツの「卵を返してください」の台詞はよく知られているし、「空の大怪獣ラドン」も、卵が印象的な描かれ方をしている。

# 内坪井町日記 (20)

齊藤仁昭(ケバブジョンソン・

元長崎書店勤務)

んばかりするか、とまだ踏みどまれてはいる。別に他人のためではないのだが。でも子どもを犠牲にしちゃだめだよな…。

十二月は三日しか休めなかつた。そのうち二日はケバブジョンソンの練習で、一日はライブだつた。とにかく疲れてしまつたのでそんな風に思つてしまつたのかも知れない。

邪念? を振り払う際に「ECDの“東京ついい街だなあ”」という曲の「そんなどないって言つてくれよ、ベビちゃん」というフレーズが浮かんだ。文脈は全然違うのだが。

十二月某日

もうバンドなんてやめてさ、浮いた交通費とかで子どもに服とか本でも買ってやつたらどうだいといふやうやきが、長時間通勤中の私の頭のなかから頻繁に聞こえる。「これが魔が差すというやつ? 使い方間違つてる?」

頭を振つて、その考えを振り払う。しかし、振り払う方が間違つているのじゃないのか、というところまで考えるようになつてしまつた。確実に歳を取つてゐる。しかし実際、子どもにお金回してあげないのはすごいダメな親なんじやなかろうか。後ろめたさに負けそう。

就職などのタイミングでバンドやめちゃう人が多いのは、この種のさうやきにしかるべく耳を傾け納得しているがらなのだろうか。

なぜこうも続けてしまうことができたのか。それは杉浦と橋本の曲が好きだからと、うだけなのだが、もうひとが

十二月某日

京都にてライヴ。揚子江の12インチを作つてくれたレーベルオーナー丸山さんの誕生会。会場にピアノがあつたので全曲ピアノアレンジでやつてみた。音量がむずかしかつたが楽しくできた。とてもいい会場で、食事もお酒もおいしかつた。新曲もやつてみたが、悪くない手ごたえだつた。

十二月三十一日

夕方から神社で準備をし、22時ころから初売り開始。天

事がはかどらない。

氣も良く、多くの参拝客が妙見宮を訪れる。お店もにぎわい、仕事しているとあつという間に日付も変わって午前3時。いつたん撤収し、仮眠タイム。今年は贅沢して宿を取ってしまった。短い時間だったが、安眠できた。もうさすがに車で寝るのはきついかな…。寒さが堪える。

### 一月一日

六時に集合して初売りの続き。晴天がとてもすがすがしい。夕方までしつかり販売し、終了。

今日は夕方から家族が八代に来て、四人で宿泊することにしていた。子も喜んでいる。そうかもっと稼げばバンドの後ろめたさもなくなるのかな。両方やればいいんではないか。やるぞ俺は。

実家の母から預かったお節を妻がもつてきてくれたので、宿でちびちび食べながら少しだけビールを飲んで、(ちや)ちや子どもたちと楽しい話をしながら就寝。

翌日と翌々日まで初売りを続ける。

### 一月某日

先月から年頭までがんばって働いた反動で燃えつきて仕

そんなこんなだが懲りずに練習。練習前に時間があるのだが、東京で行きたいところが特になくて困る。長澤信子『台所から北京が見える』(筑摩書房)を喫茶店で読みながら時間を過ごす。まっすぐで熱心で、ユーモアを忘れない文章って、今だと誰が書けているのだろうか。そんな人の本が読みたい。

女神転生というRPGゲームを知っていますか?僕もうろ覚えなのだが、主人公の行動次第で自身が天使的になるか悪魔的になるかが決まっていく要素があつて、当時は悪魔にならないよう気を付けていたような記憶がある。で、今ですが、なんか社会が悪魔的なものに寄つていて、感じております。ちょっと不穏な気持ちがあります。みなさんどう感じていますでしょうか。

## 迷つた先のわたしの言葉

川浦 永理

(三十一歳・女性)

ロンドンに来てまで、私がやるつむつむつむのは、日本の教育に関する研究だ。といつても、日本の人口は減つて、一方だし、田安の影響も大きい。海外で過つてしまふ日本の凋落は明らかだ。

私が学部時代を過ぎました十二、三年前、旅行したロンドンは物価の高い街だった。それでも日本の一・五倍くらい。今は、スーパーで適当に売つているサンディッシュが三・五ポンドか、四ポンドとなると、七田から八百田。アホらしいほどの物価で、イギリスも日本もある意味でタガが外れた状態だ。

そんなイギリスで教育業界の展示会である「BETT 2026」に参加した。いわゆる Google のよつたな企業が、小さな EdTech 企業まで様々な会社の様子を見つれる機会だった。会場には、ヨーロッパからだけでなく、中国の企業や、韓国の企業、韓国政府のブースまであったのに、日本の企業は一、二社。「日本はハイテクの国でしょ」といふあまり

が、教育というものはグローバルな視点で共通して、いる問題と、ローカルにしか存在していない問題がある。

会場では AI という言葉がしきりに繰り返される。AI によつて便利になる。AI によつて時間は短縮されるけど、仕事がその分減るわけではないのでは? 勉強時間も短くなるのか? AI の質の保証に対しても、どのように政府が介入すべきか? ティープフォイク画像による性的ないじめにどう対応するのか?などなど。これらは、正直世界中(生徒に)デバイスを与えてしまえば)でも起きうる問題だらう。Google の会場では小学生がプレゼンターとして、AI の活用方法を紹介していく。

「AI searches. I think. (AI が検索して私が思考する)」

知識の基盤を準備するのは、教科書ではなく、AI になる。かつては情報を整理するために集めるところから、人間の批判的思考は始まると言われていた。その段階の線引き

のイメージを持つてくれて、いる外国人も同世代にはいねけれど、「この状況を見てよ、いやれなくなると思つよ?」と返してしまつた。人口も減つていくのに、外に出していく元気もない日本。そんな日本に戻つて意味があるのか、少し考えてしまつた。いいもあ。

は、変わつていいくのがもしされない。

会場では、初めてイギリスの国語の授業の模擬授業を見た。Microsoft の One Note を活用した授業で、教員は授業中に机間巡視(いわゆる教室を歩いて回る)ならぬ、タブレット間巡視をしていた。課題を書き終わった生徒にその場で「ハイドバックを書き込んでいくのだ。タブレットの操作画面を観察する」とができたので、紙の頃より如実に進捗を把握できるという。そこで、オランダの教員の一人が「生徒がタスクを終えてしまつて、他のサイトを見ている」ということはありませんか?」と質問した。その質問は、私も教員をしていた頃に何度も考えていた問題だった。授業をしていた教員は「生徒のことはペリコプターのように見て回つています。生徒もスクリーン上を見られていて、知つていて、から、変なことはしません」と答える。が、テクノロジーを用いた管理教育はどうなんだ、怖くないかと思つてしまつた。私は自身は、落書き同様なくすことはできないし、それも一つの教室でのあり方だとは思う。

まり日本語はほとんどの生徒にとっての母語で流暢に扱える」という「二重の单一言語主義」前提の教育は、日本という国歴史的背景、経済的背景によつてこそ、成立しているもので、非常にローカルな取り組みだ。Multilingual(多言語)な背景を前提とするロンドンの教育現場と、日本の教育現場の状況は異なる。実際、日本でも移住の数は増えているものの、ロンドンの superdiversity も言われる状況は、その比ではない。いくつ經濟的に衰えようと、英語という言語によって、移住のハードルは下がる。いくつ学費が高くなろうが、私のように勉強をしにくる学生の数も減る」とはない。

自分の教室の文脈で考へてきた私がどうやつてグローバルな物語に自分の考へをのせることができるか、考へることもある。そして、ロンドンの研究の場で、私のローカルな研究が何のインパクトを与へられるのだろうかとも思う。そんな時に自分が過去に書いた言葉を振り返つた。そこにあるのは、小さな声。小さな物語。自分の身の丈で、精一杯生きる声だつた。大きな物語。理論化。一般化。その逆の小さな積み重ねが眞理を見つける時もあると、過去の自分からの戒めでもある。

翻つて、私が取り組もうとしているのは、英語と国語の連携、つまり言語教育を通して、批判的思考力や表現力を磨けないかということなのだ。しかし、このように「英語は外国語で習得が困難」「それでも経済のために英語が必要」「国語つ

# としのはじめのめがねとて

あきの素生

(くうねるめがね)

年始から雪に翻弄された。冬になる前から、今シーズンは雪が多いらしい、と言っていたが、そう言ってあまり降らない年もあるし、と呑気に構えていた。今回は予測が当たり、年明け早々、列車の運行情報や道路に備え付けられているWebカメラの映像の確認に明け暮れるはめになつた。道路の予防的な通行止めも実施されたりして、鳥取にたどり着く手立てがなくなることもあり得るのだと身に沁みて感じた。

雪が積もると、非常時スイッチが入るのか、アドレナリンが出ているような感覚に陥る。決してうれしいわけではなく、できればあまり積もつてほしくない。にもかかわらず、例えば雪かきをするときなどは、俄然張り切る。後でどつと疲れるし、筋肉痛にもなるのだが、そのときのその感覚は、嫌いではない。近所で、除雪後交差点に集められて山になっている雪に、人が一人入れるくらいの穴をあけて、かまくらが作られていた。こういった、誰かが雪を

楽しんだ跡や、新雪につけられた動物の足跡などは、うんざりした気持ちを晴らしてくれる。

そんな年のはじめに、最も気持ちを晴らしてくれたのは、家に届いた新しいめがねだつた。

年末にふらりと入っためがね店で作つたためがねだ。以前、サウナ用めがねを購入したと書いた。様々な機能を備えためがねが生み出されていることに感銘を受け、以来、そのめがね店を見かけるとほぼ毎回足を踏み入れている。そして、ほぼ毎回新たな発見がある。とはいって、毎回めがねを購入することは難しく、後ろ髪を引かれるような思いで店を後にすることが多い。

お気に入りのめがね本で、とにかくいろんなめがねをかけてみることがすすめられていたこともあり、めがね店に入つたら、形や色にこだわらず、あれこれとめがねをかけてみる。以前は、レンズの形が横長の橢円形になつていて、オーバルや横に細長い長方形のスクエアを好んでかけていたが、真四角に近くて存在感のあるウェリントンや丸みのあるボストン、さらにまん丸のラウンドにも憧れがあり、自分に似合うものがありやしないかと期待を込めて試している。似たような形のめがねでも、ブリッジの位置ひとつ

で印象が全く異なるのが興味深い。ちなみに、『Dr.スランプ』のアラレちゃんのめがねについて検索したら、A.I.が「ボストン」と解説してくれた。私のイメージではウェーリントンだったのに、思わず画像検索までしてしまった。その時々で微妙に形が違うようで、どの形と断定することは難しそうだ。

もともと、めがねに惹かれたのは、音楽雑誌で紹介されていた或るアルバムのジャケットを見たことがきっかけのひとつだったように記憶している。黒いセルフレームの個性的な大きいめがねをかけたアーティストの写真。黒縁のめがねってかつこいいなと思った。当時、流行っていたのだとも思う。件のアーティストのようなめがねは自分にはハーダルが高すぎたが、墨縁のスクエア型のめがねを貰つてもらつた。なりたい自分に近づいたようであれしく、学校にめがねでも行くようになった。

以来、赤や紫、べっ甲柄のセルフレーム、下半分にだけふちのあるアンダーリム、度が強く、レンズが厚くなりすぎるため手が出しにくい細めのメタルフレームを伊達で、など、いろんなめがねをかけてきた。めがねをかけなければけるほどこだわりが生まれ、新たに得た情報でそのこだわりを手放したり上書きしたりして、今に至る。

そんな中で、これがほしいな、と感じためがねがあった。機能が目新しく、自分のこだわりを叶えてくれるものだつた。試着して、形や色もこれだと見えるものが見つかった。でも、当時かけていためがねがとても気に入つていたので、すぐに迎え入れることはなかつた。

それからしばらく経ち、たまたま別の店舗の前を通りかかつた。チエーン店で、いろんな場所に店舗があるので、しばらくめがねを買つていないし、そろそろ許されるのではないかと思い、例のめがねを探した。ところが、以前入つたお店とは品揃えが異なり、田当てのめがねは置いていなかつた。とても残念だつたが、せつかく来たのだからここででもまためがねの試着にいそしんだ。すると、ほんの少し変わつた形のめがねがあり、それがすっかり気に入つてしまつた。めがねにも、縁や一期一会みたいなものがきつとあるのだと自らに言い聞かせ、スタッフの方に声をかけた。

レンズの取寄せ等でめがねができるまで半月くらいかかると聞いていたのが、ずいぶん早く送られてきたので、思いがけずうれしい年明けとなつた。今年もまた、新たなめがねとの出会いがあるかもしれない。

## 冬の「おとんグルメ」



# ドラマリア (座敷わらし)

たが、自分で作ると何の変哲もないインスタントラーメンにしかならず、野菜はたっぷり摂れるものの、あのわくわく感は乏しかった。

今年の鳥取は雪が多い。しんしんと雪が降る冷え込んだ夜は、何か温かい食べ物が欲しくなる。そんなときに思い出すのが、実家の父お手製の夜食ラーメンだ。夜ふけに二階で勉強していると、トントンジュワーと美味しそうな気配がして、呼ぶ声に階下へ降りていくと、姉と私二人分のラーメンが出来上がっている。これが実に美味しいくて、さ

なお白状すると、「夜更けに勉強している」と書いたが、勉強を頑張った記憶はほとんどない。実家時代にもつとも上達したのは、自室の引き戸（鍵をかけられないといふ悲劇）を外から開ける気配がしたら、すぐさま読んでいたミステリ小説を隠して問題集を解いていたばかりをする、という早業だった。眞面目なふりは昔から得意だったなど思う。

とりわけ強く印象に残っている。

凝った食材を使っていたわけではなく、調理方法も至って簡単だったと思う。炒め物至上主義の父が、そこらのキャベツやもやしや何やらを適当に炒めて、更に卵も適当に炒めて、袋ラーメンを二つに分けた丼の上にどっさり盛り付けただけ。それなのにどうしてあんなにも美味しかったのか。一人分を二人で分けたからこそその少し物足りないボリューム、夕食をきつちり食べたうえ更に夜中にもりもりり食べる背徳感、勉強を頑張っている=褒美であるという達成感……そんなものも味を引き立てるスパイスになつていてのだろうか。時々思い出してあの味を再現しようと試みたのだろうか。時々思い出してあの味を再現しようと試みたのだろうか。

• 編集後記 •

今年の鳥取は雪が多く通勤も雪かきも大変ですが、実は雪は大好き一です。いつもと違う通勤ルートも面白いし、雪が降る光景をいつまでも見ていられる。先日の夜はとても気温が低く、冷えた道路に散った雪の粒がさらさらして氷砂糖のようで、とても美味しそうでした。

新しい仲間に今回から堀内菜摘さんが加わりました。いま仙台在住。転勤組です。変わるもの変わらないもの、その交わるところで、書き続けてくださることを期待いたします。

奈良敏行（発行人）